

英語嫌いの学生とどう向き合うか

How do we teach students who don't like English?

菊池 せつ子

Setsuko KIKUCHI

Abstract

Looking back over the 30 years of my life as an English teacher at College, my purpose and aims of teaching, learning and studying English have been enlightenment, encouragement, enrichment and enjoyment through English for both of my students and myself.

How to teach students who don't like English has been a big problem for me to this day. First, it is necessary to know what caused students to hate English; main causes are 1) Lack of their efforts 2) Getting no products 3) Boring and painful class 4) Hating a teacher of English, and 5) Teachers' casual words and behavior which hurt students.

So teachers must give English class in which students aren't bored, or can have confidence. Some ways to solve for them are participating in group or pair work in dialogue, and individual student autonomy were both influenced by the teachers' advice. This study note investigates how students who hate English enjoy working together between students and teachers in the classroom.

That is, when classroom activities focus on the co-operation, creativity and imagination of both students and teachers, they become more enjoyable, meaningful and more effective. Finally, I would like to teach, learn and study English with students, believing in their possibility or the power of growth.

Key words : the Causes of hating English, Reliable relationship between students and teachers, Teachers' endeavor at class

キーワード : 英語嫌いの原因、教師と学生との信頼関係、授業で心がけること

はじめに

入試形態の多様化に伴い、学生の学力も様々であり、「英語が嫌い・苦手」という学生が多く入学してくるのが実情である。英語は嫌いだけど、受験の科目に入っているから仕方なく——そんな理由で英語を勉強した人は少なくないだろう。さらに文部科学省の有識者会議で英語教育の改革案¹⁾がまとまり、「小・中・高の子どもたちは、アジアトップ級という、より高い目標に向け、より長く学ぶ」こととなった。そういった状況の中で大学において、「英語嫌いの学生をどう英語好きにするか」は英語教師にとって、永遠のテーマと言える。しかし、アルファベットを見ただけでも拒否反応を示す者や、特に発音・文法や長文読解など、英語に対して重度のコンプレックスを持っている者も少なくない。ゼロからのスタートであれば指導はしやすいが、早々と中学で挫折してしまい英語嫌いとなり、すでに「英語ア

レルギー」を持っているマイナスのスタートであるから、大学での英語教育はなかなか手強い。

4月に入学してきた学生に、「なぜ英語を勉強しないといけないの？」と聞かれることがたびたびある。その時は「今やグローバルな世の中になってきたので、世界の共通たる英語は今後必ずや必要になる」とか、「最近では英語を重視する会社が増えてきたから就職に有利」、「英語ができると、インターネットや海外旅行などで世界中の人々と話ができる」などと答え、英語学習の必要性を強調し、何とか学生が英語に興味を持つように説得を試みる。

もちろん「なぜ英語を勉強しないといけないの？」という質問は、英語が好きではないまたは苦手な学生が発することが多い。ということは「英語が苦手または嫌い」という意思表示でもある。ならば、まず説得する前にその発話のもとになった学生の気持ちの根源、つまりや「なぜ英語が嫌いまたは苦手になってしまった」か、その経緯を考えてみることが

肝要であり、そして様々な理由で「英語嫌いになってしまった学生」に対処する方策を取る必要がある。

こういった学生の中にも、英語は苦手、嫌いだけれども「英語はしゃべりたい」「英語が話せればかっこいい」という思いを抱いている者も少なくないのも事実である。2020年東京開催予定のオリンピック・パラリンピックに向けて、その傾向や思いはますます強くなるのではないと思われる。このような学生に対して、学習の場としての最終段階になるかもしれない大学においては、英語学習に対して自信を取り戻し、英語が苦手でも英語（学習）に対して苦手意識を払拭し、卒業後も英語が必要とされる時、自主的に学習してくれることを切に願いながら、「英語嫌い・苦手」となってしまった学生のための改善策を考えてみたいと思う。

英語が嫌いになる原因

英語教師としての目標は、「英語が好きな学生を増やし、嫌いな学生を減らすこと」であり、「英語が大嫌い、苦手」という学生に対しても、何とか「好き」になったり、興味を持って、卒業して欲しいという思いで、常に指導しているが、経験上「英語嫌い、苦手」になってしまったのには大まかに言って3つの要因が考えられる。

(1) 本人の努力不足で英語が分からない。

このタイプの学生は、叱責したり皮肉を言うのではなく、中学や高校の英語に対する嫌な思い出を忘れ、一から始めようと呼び掛けると良い。そして、4月の第一回目の授業で、英語学習をスタートするに当たり、まず、予習の仕方・辞書の使い方など、具体的に何をしたらよいかを明示することから始め、最初の1、2ヶ月は授業で辞書の引き方などを根気よく説明し、実際に学生に辞書を使わせ、分からない語彙を調べさせる。手とり足とり行うことが必要である。さらにどんなことができるようになって欲しいかを考え、逆算して学期ごとの到達目標を決定する。まずは分からない単語を辞書で引き、予習する習慣を身につけるとか、語彙を増やすとか、分からない文法項目を復習しマスターするとか、学生各自に各学期のcan-do listを作成させ、到達目標を決める。嫌いな科目に対して何かができるようになるためには、ある程度の労力が必要であるから、好きな洋楽を聴くとか、好きなスポーツや料理、ファッションに関する英語句を覚えるといった、学生が興味を持つワークも加えると良い。学生にそれらを促

し、学生がその努力をしているとき、寄り添って励まし、出来るようになるまでアドバイスと応援をしてやれば、学生は次第に教師に対して心を開き始める可能性がある。

(2) 英語学習を頑張っても、成果が出ない。

高校でまたは早々に中学で文法や単語が覚えられない等の理由で、英語学習に挫折してしまっただけの学生は、頑張ってもやっても一朝一夕には成果は望めないことは明らかである。努力はしているが成果が出ない学生の中には、力がつかない家庭学習を繰り返していることが多い（またアルバイトや部活などで予習の時間が取れない学生もいる）。暗記の為にひたすら単語を書いているものの、それが単なる作業になっており、それらの単語が英文の中にあっても意味を思い出せなかったりする。また、今なすべきことを考えず、タイムリーではない、ピン트가外れた勉強をしている学生もいる。

こういう学生は、人の話を聞かないタイプや、そっかしい子である場合が多いので、学習に集中できずに、ただ写すだけ、書くだけで頭を使っていない場合が多い。つまり効率のよい時間の使い方をしていないのである。いずれにしても、努力しても成果が出ない学生は、学習方法を間違っているか、また何をどのように勉強したらいいか、分かっていない場合もある。学生の成績が上がらないときは、その原因を探り、その都度様々なアドバイスを個別に与えながら、たとえ横道にそれとも見捨てず、長い目で見守っていく必要がある。

(3) 英語の授業がつまらなくて苦痛である。

このタイプの学生に対しては、英語学習の重点目標の一つを、教員と学生間の単なる知識や技術の教授だけでなく、学生と教員または学生同士の「関わり合い」として授業を行うことが大切と思われる。教師の指示・発問が良質であれば、学生は自ら考え、自然発生的に話し合いが始まる。お互いが考え、気づき、認め合う場面がある授業では、英語学習の楽しさを感じる学生が多いからである。

授業のキーワードは「伸長感」「達成感」「満足感」と言える。伸びていく手応え、今までできなかったことができた時の喜び、スピーチなど苦労して準備したものを成し遂げた感動、教師に褒められた時の満足感、友達を手伝って感謝された時の嬉しさ、一人で苦しんでいる時に友達が救いの手を差し伸べてくれた時の安心感等、つまり英語の授業を好きになる要素は、教師主導だけの授業では生まれてこない。

学生が教師とともに英語を「好きになる要素」を体験する必要がある。

教師は授業に対して、準備に多くの労力を使い、残りを授業当日の「我慢強さ、学生目線での観察、そして良質の声かけ」に費やす必要があると思われる。

(4) 英語の先生が嫌い

アンケートなどで「英語が嫌いになった」理由を学生に聞くと、何人かの学生が「先生が嫌いだったから」と答える。いくら英語の指導技術があっても、教師と学生の信頼関係がなければ、深まりのある、学生が伸びていく良い授業はできない。学生が教師を嫌いになるのは、以下のような原因があると思われる。

- ① 教師の人間性に問題がある。
- ② 教師のフラストレーションやストレスを学生にぶつける。
- ③ 教師に指導力がない。
- ④ 教師の容姿・服装などが、学生に受け入れられない。
- ⑤ 「大人」や「教師」への反発。
- ⑥ 教師の何げない言葉、行動が学生を傷つけている。

このうち①、②は問題外である。③は、急速に変化する世の中の動向に応じた指導法が共有されるためには、教員が研修会や研究会へ積極的に参加したり、教員と大学など教員養成機関、教育委員会などが協力して教員の指導力や学生へのサポート力を高める努力が必要である。学生間のトラブル解決のための支援、個別の悩みに対する適切なアドバイスなどができる教員に対しては信頼感が生まれ、学生はその担当教科を頑張ろうとする傾向があるのは周知の事実である。

④は気をつけたい。思春期の学生は、教師が思っている以上に外見を気にする。自分のことだけでなく、人のことも嫌いになりやすい時期である。容姿は簡単に変えられないが、服装や頭髮など、清潔なイメージを持たれるように心掛けたい。

⑤の大人不信の学生は、親や身近な大人の言動に失望している可能性が高い。最初は反発を受けても、あまり自分を責めないほうがいい。その先生の責任ではないからである。それよりもむしろ、嫌らわれても嫌らわれても、その学生のためにできることを考え、用意し、語りかけると良い。ただし、あまり多くを要求したり、しつこくなることは避けたい。

最終的に教師と学生の信頼関係は、教師の誠意の量で決まる。「君のことも他の学生と同様、大切に思っているよ」というメッセージを粘り強く送り続けることが必要である。

前項の⑥の教師の何げない言葉や行動については、我々教師は、時に無意識のうちに学生を傷つけたり、学生の意欲をそいだりする言動をしてしまうことがある。例えば、音読が苦手な学生が、みんなの前で音読させられて読めず恥ずかしい経験をしたため、トラウマとなり英語嫌いになる学生もいる。苦手な学生に配慮しているつもりでも、英語教師である自分には到底気がつかない、深刻で払拭できない苦手意識を英語学習に対して抱いている学生がいることを肝に銘じるべきである。

「英語が苦手」ではなく、「英語が嫌い」と言う学生の気持ちは、英語そのものと言うよりは、英語の授業中に受けた辛い経験から来るようである。学生の声を聞くと、「こんなこともわからないの?」「これはできて当たり前」「この問題は中学生でもわかる」「君は発音が悪い」と教師に言われ、完全に英語嫌いになったというものもいた。教師の不用意な発言で学生の意欲を削いでしまうことが往々にしてあるのだ。また、「英語が得意な学生と自分との扱いが違う」「先生の指導が一人の学生に集中する」「自分なりに予習したのに、不十分だと言われた」など、デリカシーのない不用意な教師の態度に、学生の不安はさらに募るようである。

また、せっかく学生が頑張ったのに正当な賛辞がなかったり、一方の学生を褒めてもう一方を褒めなかったり、あるいは間違った答えを言ったときにぞんざいな対応をしたり、発音したくない学生を指名して発音させたり、自分が学生の時に嫌だったことを忘れてしまって、学生にやっちゃっていることがある。

学生の集中力は30分程度しか続かない。隣の学生とおしゃべりをしたり、スマホや携帯をいじったり、イヤフォンで音楽を聴きだす者もいる。集中力が切れた学生を叱るのは、あまり良い方法とは言えない。集中力が切れる頃に、体を動かしたり、脳をリフレッシュさせる活動を入れたり、またその時ヒットしている映画や歌のタイトル等、受講している学生が耳を傾けたいくなるようなタイムリーな話題や旬な出来事を取り上げ、授業に結びつけるなどの工夫をする必要がある。英語嫌いの学生については、本人の努力不足が半分、教師の指導ミスが原因であ

るのが半分と考えた方がいいのではないだろうか。

授業で心がけていること

「英語が嫌い・苦手」な学習者に対して、次の 5 点に心掛けながら授業を展開する必要があると思われる。

(1) 音声中心の授業

英語を専門科目ではなく一般科目として履修する学生の中には、入学当初には簡単な単語や文さえも声に出して正確に読めない者も少なくない。特に中・高で音読の習慣がない学生の場合は顕著である。それ故に、クラスでは特に 4 月から半年ぐらいいは、音読を授業の軸に据えていくのも、文法や長文読解が苦手な学生のためには、一つの方法であると思われる。英語の歌なども人気が高いので取り入れるのもよい。まず CD でネイティブの音声聞き、クラス全員にリピートさせ、次に教員が音読し、それについて個別に音読させる。平坦な音読にならないように、ブレスの継ぎ方、日本語にはない英語独特の発音、日本語にはない複数形の発音などにも気をつけるようにアドバイスする。

学生の「英語をしゃべりたい」「英語が話せればカッコいい」という思いを実現させるためにも、基本である音読が第一歩であると考えからである。学期の後半、簡単な 1 分程度のスピーチ²⁾を課していることも、音読練習の動機づけになっている。文法や長文読解にアレルギー症状を示す学生でも、学生同士の英会話や人前でのダイアログのワークは抵抗がないようである。それどころか時間がない場合など、短時間で終わらせようとする、終了のチャイムがなった休み時間になっても、暗唱を聞いて欲しいとせがまれたりするから驚きである。人前でのパフォーマンス好きな現代っ子の一面を垣間見る思いである。さらに、耳・口からだけでなく視覚によるビデオ教材の利用も、ビジュアル時代の学生の興味を引くには十分と言える。

(2) 飽きさせない授業

英語が嫌いな学生にとっては、90 分の授業はかなり堪える。従って、飽きさせないためにも、授業では、原則「単語テスト」、「リスニング」「リーディング」「歌」を軸とし、時には「ライティング・ディクテーション」や「スピーキング」を取り入れ、ダイアログのグループやペアでのロールプレイング等を行う。ただし、「リーディング」をとっても、内容理解や音読などの活動を含んでおり、学生は 90 分

の中で 8~10 種類の活動をこなすことになり、変化をつけることによって、英語が苦手な学生にも飽きない工夫を行うことが必要である。苦手な文法や長文読解は、様子を見ながら適度に取り入れることが肝要である。

学生の集中力が切れた頃には、教師の一方向的な講義形式の授業だけではなく、学生同士のペア・グループ活動を取り入れ、音読の練習を十分させると良い。教師が学生の興味を引くトピックやダイアログを課し、学生にペアでダイアログの練習をさせたり、グループでトピックについて話し合いをさせると、学生は自分の周りで興味のあることが見つかった時や、何か気がついた時は自発的に発言したくなり、その結果グループでの話し合いが熱気を帯びることになる。教員は学生がペア・グループ活動をしている時は、教室を巡視しながら学生の声に耳を傾け、気持ちや感情を察し、個々の学生に注意を配り適切なアドバイスを中心掛ける。

(3) 自信をつけさせる授業

「英語が嫌い・苦手」な学生の中には、中学・高校時代に英語学習で教師から褒められた経験を持つ者はそう多くはなかった、それどころか試験で 30 点以上取ったことがない者（いわゆる赤点）もクラスで 2 割程度いた。だからこそ、授業では、学生の少しでも頑張っている瞬間や意欲を感じれば、それを素早く察知し褒めてあげる。30 人程度のクラスであれば、90 分で 1 人当たり必ず 1 回は指名するが、学生の発音が間違っていたとしても、発音した行為に対しては、「good try」と認めた上で、日本語訳に関しては、まずは出来るだけ学生の力で訳させるようにし、部分的にでも訳ができた場合は頑張ったことや意欲を認める。さらにポイント（日本語訳したり練習問題を解いた場合、間違っていたとしても意欲的に取り組んだ場合 1 回につき 1 点³⁾）を与える。そして教師は必要に応じて、学生が興味のあるまたはタイムリーな文化的・歴史的な背景等の解説を加え、日本語訳を補足する。理解度チェックなどの練習問題の解答については、学生が難しいと感じているところに対して、ヒントを与えながら正答に導くよう心掛け、間違ったとしても一生懸命解こうとした奮闘振り・意欲などを評価する。

4 月の授業スタート時は、音読や日本語訳は一人に英文 1 文を音読・日本語訳することから始め、それに慣れてきたら課する英文の量を少しずつ増やし、最後は短いパラグラフを与える。最初から、課題を

多く与えすぎないことが肝心で、苦手な学生でも練習問題の解答や、日本語訳をやってみようという気にさせるように配慮する。大量に課題を与えないことは、授業の最初に、自分もやればできるんだという達成感を味あわせ、これから続く苦手な授業になんらかの自信をもって、臨ませるよう仕向けることにある。

さらに、必ず結果に結びつき、学生のモチベーションが上がることから始める。例えば、単語テストや音読テストなどは取り組んだだけ結果につながりやすい。やれば伸びるという感覚を身につけさせるのである。「頑張ればまだまだ伸びるぞ」「できるようになってきたな」という声かけを学生は欲している。英語が嫌いでなくなった理由として、「単語テストでいい結果が出せた」「英文を読めるようになってきた」を挙げた学生が多かったのである。つまり、厳しい言葉だけを投げかけたり過大な課題を課するより、小さな成功体験を積み重ねていくほうが、大きな成功に導きやす可能性は大であると言える。

(4) 学生主体の授業

授業では、学生に自分自身で「問題を解いたり、英文を和訳する」機会をできるだけ多く持たせるよう、課題の内容や発問の仕方に工夫している。活動においても、まずは「自分で解いたり、日本語訳を考える（時には予習をしてこなかった学生に、教室で辞書を引かせ意味を確認させる）」ことを習慣づけ、内容理解や音読で個人指名をした後には、必ずペアやグループで学び合う時間を設けている。従って、授業の半分近くもペア・グループ学習が占めることになることもある。昨今の孤立傾向にあったり、コミュニケーションが苦手な大学生に、英語という言葉を通して、他者とかかわることの楽しさや喜びを体験させたいという願いからである。人間は他者との関係性の中で生きていて、自他に対する理解を深めさせることも英語教育の主たる目的の一つであると私は感じているからである。

学生間においては、fast learners が slow learners を助けることは、学習において効果が上がり飽きさせない。それは fast learners がやるべきことを終えて満足していることが必要条件である。普通は、誰しも人よりも先に行きたいと思うものである。十分に自分のことが終わりきっていない学生に「終わったら友達を助けなさい」と言うと、その学生は教師に対して反発心を抱く可能性がある。2つ、3つと課題をクリアして余裕が出た時に、「あの子はま

だ1つ目だから、手伝ってあげてくれるかな」と頼むと、自分はその子より2つ進んでいるから、まあいいかと思って手伝ってくれる。そのうち、教えることの面白さを知り、手伝ってあげた友達に感謝されたという体験をしてくれたらと願い、また学生同士の「互助精神」を促し、信頼関係を結べれば幸いである。

さらに、日本語で言いづらいことでも、英語では言える言葉もある。毎年4月当初は、ペア・グループ学習に慣れていないせいとかうまく参加できない者も少なくないが、「お互い助け合うこと」の意義を繰り返し訴えることで、5月以降はほとんど全員が主体的に取り組むようになる。協働学習の効果として、英語を学ぶ動機づけが高まる、学習不安を軽減できる、学習に対する肯定的態度を促進できるなどが挙げられる。

(5) 学生との信頼関係に基づく授業

「学生は教師という人間に出会うのであって、教材と会うのではない⁴⁾」と言われる。経験上、教科の好き嫌いは担当教師の持つ魅力や人間性、学生の担当教師への憧れといった情意要因の影響が大きいと感じている。上述したように、学生に英語を嫌いになった理由を聞くと、「英語の先生」が嫌いだったと言う学生が必ずいる。とりわけ、他者とのコミュニケーションを大切にする教科である英語は、その傾向が強いのではないだろうか。教師との人間関係に支障をきたし英語が嫌いになった学生の中には、のちに教師から見捨てられているといった被害感情を抱くことがよくある。そして、「見捨てられ感情→嫌い→できない→褒められない→見捨てられ感情…」という悪循環を形成していく。

この負のサイクルを断ち切るためにも、教師は学生との信頼関係を構築（回復）することが不可欠となる。特に、大学では中・高時代と比べ学生とあまり顔を合わせる事がなく、学生と教員の関係が希薄になりがちである。特に英語が嫌いまたは苦手な学生は、英語教師に学生のほうから近づいてくることはまずないので、教員が学生の名前を覚えて挨拶したり、休み時間や放課後など積極的に話しかけをするなど、声かけや何気ない対話をするよう努めることが大切となる。授業以外の場でのさり気ない対話を通して、授業では見ることのできない、異なる顔に出会うこともあり、スポーツが得意な学生や、お菓子作りが好きな学生のそういった長所を褒めると、一気に学生との距離が縮まり、苦手な英語の授

業にも、時々耳を傾けてくれるようになる。いったん相互の信頼関係の基盤が構築されると、学生の中に教師を信じる気持ちや信頼感が芽生え、その結果、その教師が担当する科目に対しても肯定的な感情を抱くようになる。

おわりに

1950年代を中心に活躍したアメリカの代表的な心理療法家であるカール・ロジャーズの理論⁵⁾を応用すると、教師の取るべき態度として、次の4点があげられる。①教師は学習者を無条件に受容・尊重すること、②教師は学習者に対して共感的理解を示すこと、③教師は学習者の一言、一言に対して心を込めて聴き入ること、④教師は学習者の可能性と自己成長力を全面的に信じて関わること。4点目については、ロジャーズはいかなる人間も自分を自己実現へと導く「可能性と成長力」を有している存在であると捉えている。従って、教師の仕事は、すべての学生に内在する「力」を全面的に信じ、それを引き出すように努めることにあると思われる。たとえばそれが「嫌いや苦手」となってしまった英語学習に対してもである。

そのためには、学生の英語嫌いを加速させ、教師に対しても信頼感を失わせ、心を閉ざし英語学習への興味を無くさせていた原因を探り、学生との人間対人間の良好な関係を築く必要があった。さらに学生の英語力や将来の夢、英語学習に関する目標、普段行っている学習方法などを把握し、英語力については多角的に分析・評価することが大切である。学生の中には「自分が意識的に頑張っているところを褒められた」「苦手なところを先生が知ってくれ、アドバイスをしてもらった」「発音が良くなったと褒められた」こと等をきっかけに英語が好きになり始めた学生も少なくない。

英語学習に対して嫌悪感を抱いている学生こそ、教師に受け入れてもらいたいという気持ちが強く、教師からの温かい救いの手が差し伸べられるのを待ち望んでいる。教師は学生の内なる声を瞬時に察知し、その声に共感できる能力を備えていなければいけない。「英語嫌い」の学生たちとの関わりを通して感じることは、教師の学生一人ひとりを受け入れようとする姿勢は、必ず彼ら・彼女らの新しい学びの可能性を見出ししていくことであり、そして、たとえ将来英語とは全く関係のない人生を送ろうとする学生がいたとしても、英語学習や教師の中に学ぶ意味

を見出せば、積極的に授業に参加すると思われる。これからも学生一人ひとりの心の奥底に秘めたる「可能性と成長力」を信じながら、彼ら・彼女らに寄り添い続けて行きたいと思う。

【註】

- 1) 目的はグローバル化対応。教育再生実行会議提言(平成25年5月)、文科省の英語教育改革実施計画(同12月)を受け、有識者会議が9月末に報告をまとめた。アジアトップ級の英語力を目指し、小学3年から学習を開始すること、「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能を測る大学入試に改善することなどを提言している。
- 2) Recitation (暗唱)または1分間スピーチ「日本酒」(It's rice wine.)、「七夕」(Star Festival)「ひな祭り」(Doll Festival)、「花見」(Viewing Cherry Blossoms)、「結婚」(Marriage)などの日本の行事や文化、または「部活」(School Clubs)といった学生が興味のあるテーマ(既成)を選び、またはオリジナルのスピーチ「A Dream Comes True.」(「夢は叶う」)などを約1分間でスピーチ(または暗唱)する練習をする。
- 3) ポイント制の実施
①予習をしてきて、日本語訳をしたり、練習問題を解く、②テキストの中の簡単なダイアログ(対話)をクラスメートを相手に暗唱する、③授業の内容をノートにまとめるなど、各項目をクリアした場合、各1点を学生に与え、学期末にその点数を合計し、期末テストの筆記試験が60点に満たない学生に平常点として加点し、評価の参考にする。中学・高校時代に赤点などを取り、英語嫌いになり、大学で英語学習のモチベーションの低下が見られる学生のための救済策。
- 4) 潮見稔幸(2003)『教師という仕事』を再考する』『英語教育』第52巻2号、8-10頁、大修館書店
- 5) Rogers. R. Carl. 1957. The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. Journal of Consulting Psychology, 21, 95-103

【参考文献】

- 1) Brown, H. Douglas. (2001) Teaching by

- Principles: An Interactive Approach to Language Pedagogy, New York: Wesley Longman, Inc.
- 2) Ellis, R. (2003). Task-based language learning and teaching. Oxford: Oxford University Press.
- 3) Rogers, R. Carl. (1957) The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. Journal of Consulting Psychology, 21
- 4) Kojima, Hideo, Kusanagi, Yuka, Others. (2012). 「学習者オートノミーを育む大学英語授業の実践と省察」 The JACET 51st (2012) International Convention Book.
- 5) Otani, Minami, Tsuda, Sanae, Others. (2012). 「『共通語』としての英語コミュニケーションに求められるもの：コミュニケーションを教えるにあたって教師が理解しておくべきこと」 The JACET 51st (2012) International Convention Book.
- 6) Yokoyama, Akiko. (2012). Effective of Reading Aloud by Japanese Learners of English, The JACET 51st (2012) International Convention Book.
- 7) 潮見稔幸 (2003) 「『教師という仕事』を再考する」『英語教育』第52巻2号、大修館書店。
- 8) 杉江修治・岡田一彦・安永悟・三宅なほみ (編著) (2004). 『大学授業を活性化する方法』玉川大学出版部。
- 9) 細川英雄・蒲田宏編 (2008) 『「活動型」授業の手引きー内容中心・コミュニケーション活動のすすめ』スリーエーネットワーク出版。
- 10) 松村昌紀 (2002). 『タスクを活用した英語授業のデザイン』大修館書店。
- 11) 坂内正、森越京子 (2009) 「私たちの授業: 英語コミュニケーション能力を目指して」『第48回 JACET 全国大会要綱』、50-51.
- 12) 津田早苗・村田泰美・重光由加・大谷麻美 (2007) 「低学力に対するの大学英語教育再考: 低学力の実態と異文化への気付」『第46回 JACET 全国大会要綱』、88-89.
- 13) 馬場千秋、ほか3名 (2010) 「学生の英語力低下に対する教員の意識: 英語授業実情調査より」『第49回 JACET 全国大会要綱』、126-127.
- 14) 原田康也 (2006) 「自立的学習者主体の英語学習環境の構築に向けて」『第45回 JACET 全国大会要綱』、135-136.
- 15) 広瀬直子 (2008) 『日本のこと1分間英語で話してみる』中経出版社。